

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02366

研究課題名(和文) 少女マンガとスタイル画 新しい1960年代像を目指して

研究課題名(英文) Japanese Girls' Comics and \_Style-Ga\_: Toward a New Image of Girls Culture in 1960s

研究代表者

米村 典子 (YONEMURA, Noriko)

九州大学・芸術工学研究院・准教授

研究者番号：30243976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：1950年代末に登場した「スタイル画」風表現は、少女マンガ論では70年代中頃の「重層的コマ配置」の起源と見なされてきた。後者は少女マンガが独自の視覚的表現を確立していく契機として重視されてきたが、1960年代における両者の関係性については検証されないままであった。本研究では、「スタイル画」出現時の状況を明らかにし、1960年代におけるその継承と断絶を作品から検証し、1970年代の「重層的コマ配置」へは単純に結びつけることの出来ないという両者の複雑な関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「スタイル画」は1960年代には余分な装飾と見なされていたが、近年の少女マンガ論では1970年代の「重層的コマ配置」の起源として重視されるようになった。本研究では、「スタイル画」という用語の出現時の概念を明らかにし、1960年代におけるその概念の継承と断絶の系譜を検証した。結果として、すくなくとも従来言われている高橋真琴の「スタイル画」を単純に受け継いだのではないことが明らかとなり、「重層的コマ配置」に関する通説の見直しとして、重要な指摘となったと考える。

研究成果の概要(英文)：Style-Ga (a full-height illustration of a manga character in fashionable clothes) in Japanese girls' comics (shojo manga) begun in the end of 1950s are thought to have played an important role in the development of the original visual style of girl's comics, especially the multi-layered frame arrangement in 1970s. But the relationship between Style-Ga and the multi-layered frame arrangement in 1960s is uncertain and vague. This work aims to clarify their connection and disconnection, and shed new light on the issue.

研究分野：美術史

キーワード：少女マンガ スタイル画

## 1. 研究開始当初の背景

マンガ研究においては、「スタイル画」とはページの縦の高さをいっぱいに使って主人公などの全身を描いた絵で、マンガの本編中に配置されているがストーリー進行に絡まないものを指すとされてきた。マンガ本編に描かれたそうした全身図は、そこで進行している物語とは基本的に無関係に挿入されていることも特徴であった。こうした表現の起源は、光文社の月刊誌『少女』に**1958年1月号**から掲載された高橋真琴の「あらしをこえて」だとされてきた。

マンガ研究において「スタイル画」が重要なのは、それが**1970年代**に少女マンガにおいて複雑で重層的なコマ構造が発展していく契機だと考えられるからである。すなわち「スタイル画」は、映画的な少年マンガに対し文学的で微妙な心理を描写するという少女マンガの独自性が発展する重要なきっかけのひとつと見なすのが定説だったのである。たしかに、四角いコマが整然と並んだストーリーマンガにたいし、「スタイル画」の大胆なレイアウトは重層的コマ構造へと継承されるという立場は、マンガ研究者の著作においては定説化していた。

## 2. 研究の目的

**1950年代末**の高橋真琴作品に見られる「スタイル画」と、**1970年代**の竹宮恵子や萩尾望都などの作品に典型的に見られる重層的コマ構造（コマ内に収まらない人物などがレイヤーのように重なる複雑な構成）とは、少女マンガ特有の視覚的表現として高く評価されてきた。しかし、「スタイル画」が出現するのは**1950年代末**の高橋真琴作品においてであるのにたいし重層的コマ構造は**1970年代**に確立するので、その間の**1960年代**に何が起こっていたのかについては言及がほとんどないままであった。本研究では、この研究の空白地帯について、**3つの目的**高橋真琴の「スタイル画」の見直し、「スタイル画」風表現の複数の系譜の検証、**1960年代**の「スタイル画」風表現の検証を設定し、「スタイル画」から重層的コマ構造への発展を検証する。それは同時に、先行研究では谷間として見過ごされてきた**1960年代**の状況を、「スタイル画」を契機として見直すことを目指すことも伴っている。

## 3. 研究の方法

### 3- 高橋真琴の「スタイル画」の見直し

**2017年度**は、第二次世界大戦後の日本の洋裁文化に特有のスタイル画という用語について文献を調査し、少女マンガにおける「スタイル画」風表現との相違を確認した。そのうえで、『少女』に掲載された「スタイル」「スタイル絵」「スタイル画」という表現を、絵と文字の両方において調査した。高橋真琴のマンガは光文社の月刊誌『少女』に連載されていたので、同雑誌を国立国会図書館および大阪府立国際児童文学館において**1963年3月**の休刊までほぼ全号調査し、高橋の連載およびその他作品に見られる同様の表現、読者による「スタイル画」の投稿などを精査した。

### 3- 「スタイル画」風表現の複数の系譜の検証

**2018年度**は、『少女』と同時期に発行されていた月刊少女雑誌を、おもに国立国会図書館および大阪府立国際児童文学館で調査した。発行した出版社によって「スタイル画」風表現の扱いは異なっていたが、『少女』のライバル誌で後継誌が『週刊少女フレンド』であることから講談社の『少女クラブ』を主な対象として、**1962年12月号**の休刊までほぼ全号調査した。同誌については、連載マンガの他に、読者投稿の絵や連載小説の挿し絵なども調査対象とした。

### 3- 1960年代の「スタイル画」風表現の検証

最終年度である**2019年度**は、**1960年代**の少女向け週刊誌の調査を計画していた。『少女クラブ』の後継誌である講談社の『週刊少女フレンド』については、前年度と同じ図書館2館に赴いて調査を終えた。しかしながら、週刊誌となったために調査すべき全体量が一気に増加し、『少女フレンド』と同じ年に刊行の始まった集英社の『週刊マーガレット』の調査は終えられなかったため、事業期間の延長を申請し承認された。

**2020年度前半**には残りの調査を終了する予定であったが、新型コロナウイルスの流行により東京、大阪への調査出張が不可能となり、計画を変更した。変更後は、調査の終了した週刊少女雑誌の資料を中心に検討し、可能な作品については連載誌ではなくコミックス版を購入した。さらに、**1960年代**、**1970年代**のマンガ評論の複写や古書を収集した。

#### 4. 研究成果

上記 3- , 3- , 3- の研究方法に対応する成果は以下の通りである .

##### 4- 高橋真琴の「スタイル画」の見直し

スタイル画という言葉自体は、第二次世界大戦後の日本で一般女性に洋装が普及しはじめたときに、洋裁店や『装苑』などの洋裁雑誌で仕立て上がりを示すための図として使われはじめる。しかし、少女マンガにおいては異なる意味で使われていて、ページの高さ全体もしくは4分の3を使って主人公の全身を描いたものを「スタイル画」と呼んでいる。同時代の少女マンガ家たちに高橋真琴が与えた影響が大きかったこともあり、藤本由香里をはじめ多くの研究者が少女マンガを論じる際に「スタイル画」の図版として高橋の作品を取り上げることが定番化しており、出発点と言えば高橋というイメージが共有されてきた。まず、洋裁のデザイン画との相違点を確認した上で、少女マンガにおける「スタイル画」風表現の嚆矢とされる高橋真琴の『少女』連載の作品を調査した。その結果、主に以下の二つの指摘をした。

・『少女』の連載中、高橋真琴の全身図に関連して「スタイル画」という言葉が使われたのは、ほんの数回しかなかった。高橋の絵自体はスタイルと呼ばれることはあったが、読者の懸賞手本であった。この手本を元に読者が模写した絵が「スタイル絵」と呼ばれていた。したがって、高橋の絵は以前からあった読者の「にがお絵」投稿の手本と同じ範疇におさまるものであった。懸賞の手本という観点に立つと、高橋真琴の「スタイル画」風表現は突然出現したのではなく、それ以前の『少女』掲載マンガからの継続性が指摘できる。

・高橋真琴の「スタイル画」風表現は、懸賞の手本であったがゆえに本編の物語から離れる前例のない完全な自由をマンガ家にもたらした。むしろそこに「あらしをこえて」以前の「にがお絵」募集の手本との断絶を指摘することができる。その断絶にはさらに、高橋の描く服や小道具のおしゃれな雰囲気も加えることができる。

以上の成果については、以下の通り発表した。

##### 【口頭発表】

米村典子「少女マンガと〈スタイル画〉 高橋真琴の場合」第49回九州マンガ交流部会、2017年7月8日。

米村典子「デザイナーになりたい！ 少女雑誌と『洋裁文化』」第52回九州マンガ交流部会、2018年1月26日。

##### 【論文】

米村典子「〈スタイル画〉考 雑誌『少女』における高橋真琴の場合」『マンガ研究』vol. 24, 2018年3月, pp. 6-31, 査読あり。

##### 4- 「スタイル画」風表現の複数の系譜の検証

前年度は、「スタイル画」風表現は高橋真琴にはじまるとされるが、それは従来のマンガ家による手本と読者によるその模写である「にがお絵」という関係を継承しているものであり、手本となった高橋の全身図は掲載誌の『少女』では「スタイル画」と呼ばれることはなかったことを指摘した。他方、藤本由香里も指摘しているように、高橋から同時代のマンガ家たちへの影響も大きかった。そこで、次の段階として、マンガ家による手本と読者による模写という関係を念頭に、『少女』以外の雑誌、主に講談社の月刊誌『少女クラブ』の場合を調査し、検討した。

『少女クラブ』では、高橋真琴の「あらしをこえて」の連載が『少女』で始まってから約半年後、東浦美津夫とちばてつやの連載で読者による全身図の模写を募集しているが、こちらでは読者が送ってくる絵にたいし「スタイル絵」に該当する言葉として「スタイル画」を採用していた。とはいえ、高橋の全身図の特徴であるおしゃれなファッションという要素は皆無であり、従来の男性マンガ家が描く少年マンガの構造を踏襲した少女マンガの路線から大きく外れることはなかった。したがって、「スタイル画」という用語を使ったという点を除けば新奇な所は見いだせない。しかし、『少女クラブ』の編集人が丸山昭になって、女の子のおしゃれ心をくすぐる絵を描かせようという提案がされた。最初に「スタイル画」という言葉が添えられるのは、細川知栄子の1959年6月号の連載作品中であったが、高橋の場合と異なり懸賞募集の手本ではなく、明らかにその絵自体が「スタイル画」と呼ばれている。『少女クラブ』では、さらにその後短期間で大きめの全身図は何がどのように描かれていてもすべて「スタイル画」と呼ばれるようになり、「スタイル画」のもともとの意味や概念は曖昧なものとなってしまった。

読者懸賞の手本という高橋真琴による全身図の特色は、丸山昭が編集人となった『少女クラブ』では踏襲されなかった。細川知栄子の全身図は西洋志向の強い高橋とは違った傾向のおしゃれな絵ではあるが、読者との交流手段とはならず、鑑賞用と言える。その頃、少女雑誌の読者たちは、手本を真似て描くことから自らスタイルを考える方に向かっていった。『少女クラブ』に限らず、少女雑誌は読者からスタイルを描いた絵を募集し、読者コーナーにまとめて掲載していた。それまで好きな服や持っている服、着たい服を描いて送ってきていた読者は、徐々に服をデザイ

ンした絵を送るよう求められるようになった。『少女クラブ』の後継誌である1963年創刊の『週刊少女フレンド』では、細川知栄子や里中満智子の連載でしばしば主人公の服のデザインを募集して掲載しており、読者がデザインした服を作中で着せることもあった。この変化は、「スタイル画」から「デザイン画」への流れと捉えることも可能である。

「スタイル画」とは、手本を模倣して描いた絵ではなくなり、描かれた絵を見て楽しむものとなり、さらには自ら描くものとなっていく。「スタイル画」の概念は曖昧化し、あえてそれを「スタイル画」と呼ぶことも減っていった。だが、その絵がオシャレであることは、確かに1950年代末から60年代初めにかけて非常に重要な要素だったのである。おしゃれな要素は、少女マンガの主人公たちの服に残っては行かないが、1960年代は週刊少女マンガ誌の主な読者である10代前半のファッションも選択肢が豊かとなり、増えていく既製の宣伝がカラー口絵で消費を煽るように増えていく。おしゃれな要素を受け継ぐのはこうした口絵や、読書欄で募集された読者のデザイン画になっていく。

#### 【論文】

米村典子「<スタイル画>の系譜 雑誌『少女クラブ』の場合」『芸術工学研究』vol. 30, 2019年, pp. 1-12, 査読あり。

#### 4- 1960年代の「スタイル画」風表現の検証

4- では、高橋真琴の連載に見られる全身図は懸賞の手本という機能を有しており、「スタイル画」という言葉は高橋の絵にはほぼ使われていないことを確認した。さらに、4- で、読者懸賞の手本という機能を有しない全身図を「スタイル画」と呼ぶことは『少女クラブ』の細川知栄子で先にはじまった可能性が高く、「スタイル画」風の表現には、高橋真琴を唯一の起源とするよりも複数の系譜があったと考えられることを指摘した。これらを受けて、4- では、1950年代末の高橋真琴の「スタイル画」風表現と、1970年代の重層的コマ構造との間が架橋できるのか、出来るとしたらその間の1960年代に何が起こったかを検討する計画であった。おもな調査対象は、1960年代の主要な少女雑誌で、ともに1963年に発行の始まった講談社の『週刊少女フレンド』と集英社の『週刊マーガレット』を予定していたが、3- に記したようにコロナ禍の影響で調査が完了しなかったため、他の資料で補完しつつ検討を進めた。現時点ではまだ調査が必要で裏付けをとるべき部分も残しているが、成果は以下のように挙げられる。

『少女クラブ』を受け継いだ『週刊少女フレンド』では、「スタイル画」風の全身図は懸賞の手本ではないこともあって、物語との関連性もより深まっていく傾向が確認できた。また、実際の掲載数も減少の傾向が見られる。おしゃれな絵という要素は全身図にまだ求められているとしても、4- で指摘したように、読者との交流という役割は手本の模写から読者自身による「デザイン画」に交代していき、読者のあこがれを誘ったり、欲望を煽ったりする働きは口絵などに譲っていくことになる。こうした一種の衰退の一方で、1960年代後半のマンガ評論や石森章太郎の『マンガ家入門』では、少女マンガの欠点として物語の流れを邪魔したり、ただのファッションを見せるだけといった無意味な「スタイル画」がまず挙げられている。ここで「スタイル画」で共通してイメージされているのは、唐突に挿入された全身や上半身の絵であった。こうした曖昧で漠然とした「スタイル画」のイメージに、少女マンガから撤退して久しい高橋真琴の名前が起源として当てはめられることになった。

マイナス評価がプラスに転じていくのは、1970年代の24年組などの作品が評価されるようになってからである。1970年代の重層的コマ構造は高橋真琴の「スタイル画」を起源とするように記述されてきたが、「スタイル画」という概念自体が揺れ動いており、そこで想定されている「スタイル画」は高橋真琴を唯一の起源とするとは言いがたい。高橋に関して言えば「あらしをこえて」のスタイル画よりも、その連載の前に発表した読み切りの「のろわれたコッペリア」にむしろ重層性の萌芽が見られるかもしれない。この作品は「あらしをこえて」の新奇性を強調する論調の影に隠れて重視されてこなかったが、切り抜かれたような人物がコマの前に重なるさまは、重層的コマ構造に発展する可能性を持っている。この作品の文字量の多さや装飾的なコマの配置は、少女マンガよりも絵物語に近いという指摘は既になされている。こうした絵物語的要素が1960年代後半に影響を与えたのかどうかは、ほとんど研究されていない重層的コマ構造の出現を巡る経緯や評価の変遷と共に、今後の課題と考えている。

#### 【口頭発表】

米村典子「少女マンガと<スタイル画>：1960年代の展望」第58回九州マンガ交流部会，2019年12月22日。

米村典子「<スタイル画>再考：二つの系譜を巡って」第63回九州マンガ交流部会，2021年1月9日。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 米村典子	4. 巻 30
2. 論文標題 「スタイル画」の系譜 雑誌『少女クラブ』の場合	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 芸術工学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米村典子	4. 巻 24
2. 論文標題 「スタイル画」考 雑誌『少女』における高橋真琴の場合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 マンガ研究	6. 最初と最後の頁 6-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 米村典子
2. 発表標題 少女マンガと「スタイル画」 高橋真琴の場合
3. 学会等名 第49回日本マンガ学会九州支部交流部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村典子
2. 発表標題 デザイナーになりたい！ 少女雑誌と「洋裁文化」
3. 学会等名 第52回日本マンガ学会九州支部交流部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米村典子
2. 発表標題 少女マンガとスタイル画：1960年代の展望
3. 学会等名 第58回日本マンガ学会九州支部交流部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米村典子
2. 発表標題 「スタイル画」再考：二つの系譜を巡って
3. 学会等名 第63回日本マンガ学会九州マンガ交流部会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関